

「靈鷲山」考

望 月 海 淑

1

インドの仏跡を旅行したことがある人ならば、必ずといってよい程にカルカッタの北、パトナの東南方の地にあるラジギールの地を訪れ、旧王舎城の東北に聳える山の上に立ったことがあるであらう。この場所で法華経が説かれ、阿弥陀経が説かれたとされているからであるが、案内の人はそこで、この地が靈鷲山であると紹介している。正面きって異議を申したてようとも思わないが、少々はてなという感なきにしもあらずであらう。

何故ならば、旧王舎城の東北にある山は、古来 *Gṛdhrakūṭa* と呼ばれており、これを音訳して耆闍崛山としていたのであり、*Gṛdhrā* は鷲の意で *kūṭa* は峰・頂のことであるから、鷲の峰と訳出されるべきが本来であるといえるからである。その上、梵文法華経をみても、靈鷲山と訳出された部分に該当すると思われる箇所には、「靈」の意に当てはまる言葉は見られないから、これは訳者の鳩摩羅什が何かの意図のもとに、意訳を加えたものと考えるのが至当であると思われる。

そこで、その意図とは何であるのか、これがこの小論の目的であるといえよう。

2

「靈鷲山」考（望月）

論理の展開の必要上、先ず法華経經典の中における説示を見ることにする。

序品第一は法華経が説かれた時と場所を示しているが、そこには

一時仏住^三王舎城耆闍崛山中^一。与^三大比丘衆^二万人俱^二

と音訳されており、正法華経では

一時仏遊^三王舎城靈鷲山^一。与^三大比丘衆^二俱^二

として意訳であることを示している。梵文法華経は

ekasmin samaye bhagavān Rājāgrhe viharati sma Grdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣu-saṃghena sār-
han dvādaśabhir bhikṣu-sataiḥ⁽⁴⁾

(ある時、世尊は王舎城のグリドラクータ山に住し、大比丘衆二〇〇人と一緒であった。)

となしている。説示の内容は同一であるが、Grdhrakūṭa について音訳と意訳の問題がある。

次に見宝塔品においては、娑婆世界に來たつた釈尊の分身の諸仏達が、侍者を派遣しようとして

汝往^三詣耆闍崛山釈迦牟尼仏所^一

して、少病少惱にして氣力安樂ですか、と釈尊に質問させたことが示されている。これに対し、正・梵法華経はそれぞれ

汝等往^三詣耆闍崛山能仁仏所^一

gacchata yuyam Grdhrakūṭam parvatam⁽⁷⁾

(汝等はグリドラクータ山に行け)

となされていて、梵文からの音訳であることを示している。

梵文法華經によると、この後、引き続いて提婆達多と龍女の成仏が説かれているが、妙法華經では、これは提婆達多品として独立されており、正法華經には全く欠如している。添品法華經には、羅什訳には提婆達多品が普通品偈等とともに欠如しているので、訳出して法華經の中に加えるということが、「經序」⁽⁸⁾の中に明示されていることは広く知られている。依って今、提婆達多品に関する考察は割愛する。

次に、如来寿命品においては

一心欲^レ見^レ仏 不^レ自惜^レ身命 時我及衆僧 俱出^三靈鷲山^一．．．於^三阿僧祇劫^一 常在^三靈鷲山及余諸住処^一⁽⁹⁾
と述べられ、正法華經の如来現寿命品には

假使^三質直^一 說^三至誠言^一 衆生之類 朽^三棄身体^一 然後如来 合^三集衆首^一 能自示現 顯^三大仏道^一．．．如此
像誼 仏来^三至於 靈鷲之山 自然床座⁽¹⁰⁾

とせられている。この両者の説示において、後半のところでは大差がないけれども、前半のところには一見、非常な違いがみられる。生命をも投げ出す覚悟によりひたすらな見仏の努力をする時、仏は靈鷲山に出現するという妙法華經の説示に対し、正法華經では素直に仏の言葉をうけとめ、わが身命を投げ出す覚悟をしている時、仏は衆をひきつけて出現するとしているから、内容は同じではあるが出現する場所を訳出してはいないからである。正法華經は煩雑なることを避けようとしたのか、どうかは分からない。梵文法華經においては

riṅ yadā te mṛdu mardavās ca utsrīṣa-kāmās ca bhavanīti sattvāḥ | tato ahaṃ śrāvaka-saṃgha kṛtvā
ātmana darśenya ahu Gṛdhrakūṭe ||

「靈鷲山」考(望月)

「靈鷲山」考（聖月）

sadā dhīhīhānaṃ mama etad idr̥saṃ acintiyā kalpa-sahasra-koīyah | na ca cyavāmi itū Gr̥dhrakūṅṭā
anyāsu sayy'āsana-koībhī ca || (11)

（衆生等が心正しく、柔軟で、温和で愛欲を離れた時、私は声聞の集団とともに我が身をグリドラクータに出現させる。・・・考えることも出来ない千万億劫の私の神力はこのようであった。他に万億の臥床があるとしても、グリドラクータから動かない。）

となされており、Gr̥dhrakūṅṭā の語が二度とも明示されている。すなわち、妙・正両法華経ともにこの語を訳出するのに際して靈鷲山の語を使用していることが分かる。

分別功德品の中には、現在の四信中の第四の深信觀成を説く中において、仏の寿命長遠なることを聞いて深信に信解せば

則為_レ見_ニ仏常在_ニ耆闍崛山_一。(12)

と、大菩薩諸声聞衆に囲まれて法を説いているのを見る、となしている妙法華経にたいして、正法華経は、如来寿命経を聞いて、心質直にし觀喜し信せば

見_下如来在_ニ靈鷲山_一説_中是_上經。(13)

となしており、梵文法華経は、如来の寿命の長さに関する説示の法門を聞いて、強い意向信解を生じ、この意向の相の人は

idam adhyāsāya-lakṣaṇaṃ vedītavyaṃ yad uta Gr̥dhrakūṅṭā-parvata-gataṃ māṃ dharmāṃ nirdeśayantaṃ
drakṣyati bodhisattva-gaṇa-parivṛtaṃ bodhisattva-gaṇa-puraskṛtaṃ śrāvaka-saṅgha-madhya-gataṃ | (14)

(グリドラクータに行き法を説き、菩薩衆に囲まれ、菩薩衆に尊敬され、声聞衆の中にいる私を見るであろう)となしている。即ち *Gṛdhrakūṭa* について音訳と意訳との両者がなされていることが分かる。

しかして妙音菩薩品は、淨華宿王智如来の神力によって、娑婆世界に詣くことが出来るとして、三昧に入った上で於₍₁₅₎三者闍崛山₍₁₅₎去₍₁₅₎法座₍₁₅₎不₍₁₅₎遠₍₁₅₎

ところに八万四千の蓮華を化作し、法華経を聞かんがための故に、この菩薩は

而₍₁₅₎来₍₁₅₎詣₍₁₅₎此₍₁₅₎娑婆世界者闍崛山₍₁₅₎。到₍₁₅₎已₍₁₅₎下₍₁₅₎三₍₁₅₎七₍₁₅₎宝₍₁₅₎台₍₁₅₎

娑婆世界の釈尊のところに至ったことを示している。正法華経は、宿華王如来の力により、坐を立たずして

到₍₁₆₎忍₍₁₆₎世界₍₁₆₎至₍₁₆₎靈₍₁₆₎鷲₍₁₆₎山₍₁₆₎。当₍₁₆₎在₍₁₆₎如₍₁₆₎来₍₁₆₎法₍₁₆₎座₍₁₆₎中₍₁₆₎間₍₁₆₎

の地に、八万四千の蓮華を化作し、正法華経を聞かんがための故に、

到₍₁₆₎忍₍₁₆₎世界₍₁₆₎至₍₁₆₎靈₍₁₆₎鷲₍₁₆₎山₍₁₆₎。下₍₁₆₎三₍₁₆₎宝₍₁₆₎交₍₁₆₎路₍₁₆₎

としている。すなわち、分別功德品と同様に *Gṛdhrakūṭa* を妙法華経は音訳し、正法華経は意訳していることが分かる。梵文法華経は同様な意味のことを述べているが、前掲の漢訳にあてはまるところは、*Gadgadsvara* (妙音) が釈迦牟尼仏にお会いするために娑婆世界に行くでありましょう、と語り、それは如来の神力のおかげだとして、

Gadgadsvara (妙音) は座を立たず三昧に入り、

iha Sahāyām loka-dhātavaḥ Gṛdhrakūṭe parvate tasya tathāgata-dharm'āsanasya purastāt……sa yenēyam
Sahā loka-dhātavaḥ yena ca Gṛdhrakūṭāḥ parvata-rājas tenopasanīkrāmad upasanīkrāmya⁽¹⁷⁾

(この娑婆世界の王において如来の法座の前に……の蓮華が出現した。……彼は娑婆世界において山の王グリ

「靈鷲山」考(望月)

「靈鷲山」考(望月)

ドラクータに行き・・・)

釈迦牟尼仏のもとに至ったことを示しているが、ここでも分別功德品の説示の場合と同様に、妙法華経は音訳で正法華経は意訳をしていることが分かる。

普賢菩薩勸発品においては、自在な神力を持つ普賢菩薩が、東方より来たり

到⁽¹⁸⁾娑婆世界耑峯山中。頭面礼⁽¹⁸⁾釈迦牟尼仏

として、七回仏をめぐって敬いをつくし法華経を聴受せんとして来たり、聴受者を守護することを述べている。正法華経はこの所を東方より来た⁽¹⁹⁾った普賢菩薩が、

到⁽¹⁹⁾靈鷲山⁽¹⁹⁾往⁽¹⁹⁾詣⁽¹⁹⁾仏所。稽⁽¹⁹⁾首⁽¹⁹⁾足⁽¹⁹⁾下⁽¹⁹⁾繞⁽¹⁹⁾仏七匝⁽¹⁹⁾

として、法華経を聞かんとすることを述べ、梵文法華経は Samantabhadra (普賢) が娑婆世界に来たり、

sa yena Grdhrakūṭiḥ parvata-rājō yena ca bhagavāms tenopasamkrāmad upasamkrāmya bhagavatāḥ⁽²⁰⁾

(山の王者グリドラクータの世尊の所に行き、世尊に近づき・・・)

として、法華経が説かれるというのを聞いたから、聴聞するために来た⁽²¹⁾ことを述べている。

これによって見ると、細かい表現の違いはあるとしても、内容には大差はないといえるであろう。

以上、法華経における説示の中で、Grdhrakūṭia に関わる部分を妙・正・梵文法華経について、比較対照して来たのであるが、これを整理してみると以下のことが明白であるといえよう。(1) 正法華経は全ての箇所において「靈鷲山」と訳出している。(2) 妙法華経は寿量品で「靈鷲山」と訳出しているが、他の所では「耑峯山」と訳出している。(3) これらの訳語があてられた梵文は Grdhrakūṭia の一語のみである。

しかして、このような整理の上に立つて見ると、妙法華経は各箇所において耆闍崛山と音訳をしながら、寿量品においてのみ何故に靈鷲山と意識したのかということが、新たな疑問として浮かび上がって来たということが出来るであらう。

3

如上の疑問を解決しようと願って、先ず各先師の注釈を見ることにする。

法雲の『法華義記』はその巻第一において妙法華経の序品の一時仏住王舎城耆闍崛山中の一句にふれて、これは第二階の出住処だとして、王舎城のあるところには五山があり、如来はどの山におられるのか分からなかったが、

今¹的明²、仏在耆闍崛山中³、説法華経⁴上。外国言耆闍崛山⁵、此方言⁶靈鷲⁷。言⁸此山中往古諸人服藥学道成仙⁹。又山頂有¹⁰似¹¹鷲鳥¹²、故言¹³靈鷲山¹⁴上也¹⁵。

となしている。外国・此方というのは、インド・中国のことだと思われるが、山頂が鳥の鷲に似ているので、靈鷲山といわれるのだということになる。

これについて『大智度論』は耆闍は鷲と名付け崛は頭と名付くとした上で、

是山頂似¹鷲。王舎城人見²其似³鷲。故共伝⁴言⁵鷲頭山⁶。因⁷名⁸之⁹為¹⁰鷲頭山¹¹。

となし、王舎城の南の屍陀林の中には死人が多いので、沢山の鷲がやって来てこれを食らう。そしてこの鷲達が帰って山頂にいる時、人々はついに鷲頭山と名付けたとし、この山は五山の中で一番に大きく、良き林水があるので聖人が住むのだと説明している。⁽⁸⁰⁾

すなわち『大智度論』と『法華義記』との表現において、鳥の鷲に名ぞられたところは互いに相通するのであるが、『大智度論』は *Kiūia* を頭のことだとして鷲頭山とごく直訳しており、『法華義記』は靈鷲山と意訳していることが分かる。*Kiūia* は頂上のことであり、頭は人体の頂上であるから、鷲頭山の訳にことさらな問題はないが、この語には靈の意は含まれていないことを考えると、この両者の語句の違いにはいささか問題があるように思われる。

鳩摩羅什が『大智度論』を訳出したのは後秦の弘始四年から七年（402〜405）であり、『妙法華経』を訳出したのは弘始八年（406）のことだといわれる。すなわち『法華義記』を著した法雲は『大智度論』を知っていたと見ることが出来る。しかし、『妙法華経』の如来寿量品においては、鳩摩羅什自身が靈鷲山の訳語を使用しているから、法雲が靈鷲山の語を使用したのは当然なことといえるであろう。一方、鳩摩羅什は『大智度論』と『妙法華経』とにおいて同じ言葉について何故違う訳をなしたのか、疑問に思われる。しかし、この点に関しては暫く置くことにして先に進むことにする。

『法華義記』は如来寿量品に示される靈鷲山に関して、「衆生既信服」しの一句以下の十四行半は未来を頌したものだとしながら、①如来未来三過出世を明かし、②未来益人之処を示し、③疑いを釈し、④如来寿命長遠の結を挙げたものだとした上で、「常在靈鷲山」の一句以下の一行は、⑤の未来益人之処を示したものだとしている。このことは法雲が、靈鷲山という山は未来の世において法華経にかかわる人の住処を示したものだ、という意味にとったことを示すのではなからうか。すなわちこれは、死人が多い屍陀林に鷲が来て此れを食い、山頂に帰って巣くっているから鷲頭山というのだ、という『大智度論』に説明される山とは基本的に質を異にするであろう。

尚、見宝塔品以下の *Gr̥dhra-kūia* に関する説示については、分別功德品の「常在耆闍崛山」について、これは仏

在世の第四品の経を聞いた人の得る功德だと述べられるだけで、他は見られない。⁽²⁸⁾

更に、智顛の『法華文句』は耆闍崛山について、これは靈鷲山と翻じ、鷲頭といい、また狼跡という、山の峰は鷲に似て、峰を山と名付くとした上で、尸陀林の鷲にふれ、時の人は鷲山と呼ぶのだとし、更に、前仏今仏皆この山に居す、仏滅後には羅漢が住し、法滅には支仏が住し、支仏なければ鬼神が住す、既にこれ聖靈の居る所、総て三事あり、因て呼んで靈鷲山となすとしている。

すなわち『大智度論』にしめされている屍陀林の古話を『法華文句』は取り上げ、耆闍崛山を鷲頭山だとしながらも、この山に仏がとどまっておられた事実によって、心をくばった趣がかんぜられる。耆闍崛山を聖靈にかかわる山としてとりあげ、靈鷲山としてゐることは、そのためと思われる。ついで更に『法華文句』は觀心釈において、

若觀色陰。無知如_レ山。識陰如_レ靈。三陰如_レ鷲。觀_三此靈鷲無常_一。即析觀也。觀_三此靈鷲即空_一。體觀也。觀_レ靈即智性。了因智慧莊嚴也。鷲即聚集緣因。福德莊嚴也。山即法性正因不動_一。三法名_三秘密藏_一。自住_二其中_一亦用度_レ人と述べて、耆闍崛山について単にインドに実在の山として終わらせず、格別な意味あいを持たせようとして、靈鷲山をして無限なものたらしめるべき展開をはかろうとしたのではないかと思われる。

そして如来寿量品の注釈において『法華文句』は、「衆見我滅度」の下の五行は現在を頌したもので、初めの二行半は非生現生を頌し、「我時語衆生」以下の二行半は非滅現滅を頌したもので、「神通力如是」以下は常住不滅を頌し、「常在靈鷲山」とはこれ実報土をいうと説示している。⁽²⁹⁾

このような説示によって見ると、智顛が靈鷲山に関して求めようとしたものは、有限なものを越えるということではなかっただろうか。『法華文句』が非生現滅といい、非滅現滅といい、常住不滅を説いたものだという時、そこで

いう実報土は三世を越えるものであり、インドという限定された場面だけでもを捉えて考えたものではないということが出来るであろう。『法華文句』のこのような有りようは、『法華義記』の未来の益人の処を説いたという見方と相通ずるかとも思われる。

尚、見宝塔品以下の説示に関しては、分別功德品の注釈において、仏が比丘等とともに常に耆闍崛山に在るのを見るときは、方便有余土の相なり、娑婆に純ら諸の菩薩を見るところというのは実報の相なり、となしているのを見るだけである。

これに対し吉蔵の『法華義疏』は、

耆闍崛山者此云鷲頭山也。然此五山峰各有所像。今之一山似鷲頭故以名鷲。

となしている。これはこと新しいものではないが、吉蔵はこの文につづいて、仏滅後に阿育王がこの山が鷲に似ているのを見て、人をして羽足尾を彫らせ鳥の鷲にさせたとし、更に何故に仏は王舎城に多く住したかについて、『法華論』と『大智度論』の説示を挙げている。『法華論』には二義あるとし①処によって教を表さんとしたものだとし、一切の城の中でこの城は最大であり、山の中でこの山は最勝であるように、法華経は衆経の中で最勝である。②自在の功德成就を示さんとして王舎城を挙げたとし、王は世間において自在であるように、この経は衆経の中の王であるから、一乗に一切の乗を摂し、一切の乗は一乗に帰すのだとしている。『大智度論』には六種の義ありとし、①仏は摩伽陀国で成道したためにその恩に報ずるため、②土地が広く人が多いので教化しやすいため、③迦葉や長爪六師のように聡明大智の人が多いため、④この国には兄弟の龍王がいて時に雨を降らせるので荒年がなく、過ごしやすく神を練りやすいから、⑤竹林伽藍や五山の五精舎のように精舎が多いから、⑥靈華瑞草があり閑静であり神仙が多い

るからだ、と。⁽²⁶⁾

吉蔵のこの説示によって見ると、耆闍崛山は鷲の形に似ているから Gṛhṛakūṭa と名付けられたものとなるし、マガダの都があったところだということに尽きるといえるであろう。その意味では『法華義疏』には『法華文句』に見られるような観心釈は見られないが、『法華論』のこの山は一切のやまの中で最勝なように法華経は最勝なること、自在な功德の成就を示すこと、『大智度論』の神仙が沢山おり、聡明大智人が多いというような説示を挙げていることを見ると、『法華文句』の観心釈に通ずるようなものがあつたらう、と考えることが出来よう。

これに対し、如来寿命品の靈鷲山に関するところの注釈では、「衆見我滅度」の下は、得益を挙げて滅不滅の意を積す、として

常在靈鷲山下第二四行半就淨穢二土論滅不滅

とした上で、穢土は焼かれるけれども淨土は不滅である、迹身は滅を現すけれども法身は常存す、応身は滅を示し法身は不滅なり、故に身には本迹、土には淨穢があることを説こうとしたものだとなし、『法華論』等の所説を引用して論証しようとしている。⁽²⁷⁾

このような『法華義疏』の説示は、『法華文句』の説示と通ずるもので、現実を越えた所に無限なるものを見ようとしたと思われる。

尚、見宝塔品・分別功德品・妙音菩薩品・普賢菩薩勸発品等における耆闍崛山に関しては、直接的な説示は見られない。

慈恩の窺基の『法華玄贊』は、「住王舎城耆闍崛山中」について、王舎城から東北へ十四五里行くと姑栗陀羅矩吒

山に至る。唐ではこれを鷲峰・鷲台といい、鷲鳥を棲ませ、仏はこの山で妙法を説き

旧云^三耨崛山^一。乃云^三靈鷲山^一。鷲鳥於^レ此食^三人屍^一。名^三靈鷲山^一訛而略也。

とした上で、『法華義疏』と同じく『法華論』の説示によって、王舎城は他の一切の城とくらべても一番に勝れた城であるように、耨崛山は他の諸山にくらべても一番勝れた山で、これは此の法が勝れたものであることをあらわしたものであるとし、ために此の経は王舎城耨崛山で説かれたのだと、紹介している。しかし『法華玄贊』はこの後において、「古説」としてこの経は、初めは靈山、二は空中、三は浄土、四には分身が還った後の穢土に仏がおられたとする古人の説を取り挙げたうえで、批判を加えている。

それによると、説示の場所については三箇所、説示の内容では二つだとして、初めは靈山の穢土、二には分身を集めるために浄土に変えた地、三には空中、という三つの場所に説法の場面を変えたとしているが、説示の内容では、浄穢に二ありとし、初めは地上の靈山、二は空中の浄土だとしている。これによると耨崛山は地上で穢土で、如来寿量品での靈鷲山は浄土となろう。説示の内容では、地上の靈山において二乗のために一乗を説いたのと、空中で釈迦・多宝が同座し法華経に対する信を勧めた、という二説を主張している。しかし今は創会を標す故に山城を説き、住は化処を標すというから、序品の耨崛山は化のものであり、その意味では実在の山を意味させようとしたのかも²⁸もしれない。

そして如来寿量品の説示に関しては、「時我及衆僧至但謂我滅度」は、身を現じて法を説くのだとして

説法有^レ二。初一頌説^三身在^レ此現^三有^二涅槃^一。後一頌半化入^二涅槃^一。他方利益。於^三靈山^一化現。或現有^三靈山^一

としている。そしてこの後の説示において、劫尽とは化土で憂怖苦惱充滿の世だとあるから、ここで化して涅槃に入

るといふのは、仏の方便の力による化現を意味するであろう。しかしして安穩とは浄土だとあるから、それは仏をふくめ菩薩と天人とが常に在るところでなければならぬ。「俱出靈鷲山」について、靈山に於いて処現し、或は現に靈山にあるなりという時、これは安穩なる仏の浄土・仏の世界を意味することは間違いがないであろう。常に存在するものを見るのが出来るか、出来ないかは、報身仏を見れるか、見れないかの所由だとする『法華玄贊』の在りようは、心の在りようにかかわっているものであろうか。このような『法華玄贊』の説示は智嶺の『法華文句』の説示に通じているといえようか。⁽²⁰⁾

尚、見宝塔品等の説示に關しては、直接的な説示は見られない。

4

以上、法華經の注釈者の主たる注釈書における *Grdrakuta* の捉えかたを見たのであるが、各師ともに *Grdrina* をその言葉の通り鳥の鷲と捉え、*Kūpa* を頂き・峰と捉えていたことが分かる。この処を『法華義記』以外の注釈書は、すべて鷲頭山・鷲峰となしていることがこれを証明している。しかししてどの書もこの山が鷲の形に似ておるからといふ、鳥の鷲がすみついているからというのはい様である。こういうもののみかたは、当時の仏教界全体にあったものなのであろうか。

一方、『大智度論』も上述の如く、このことに言及しているから、その影響もあつたかとも思われる。しかしして『大智度論』は更に屍陀林の古事にまで言及しているが、上述の各書の中で屍陀林のことに触れているのは、『法華文句』と『法華玄贊』だけであるが、『法華義疏』もこの箇所『大智度論』を引用しているから、知っておつて省

「靈鷲山」考（望月）

略したと見たほうが至当かもしれないと思われる。

また『法華義記』は耆闍崛山が第二階の出住処だとしているが、その確たる意味は分からない。もしも地理的な場所を越えたものだという意味あいでは、と捉えることが可能であるならば、外国では耆闍崛山といい、此の方では靈鷲山というのだ、とする説示が生きてくるように思われる。そうでなければ、如来寿量品における靈鷲山は未来益人のおる所という説につながってこないからである。

『法華文句』は前仏今仏も皆この山にいたといい、觀心釈を加えている。これは耆闍崛山に特殊な意味を持たせようとしたところに発するのであろう。そして『法華義疏』はこの山は一切の山の中で最勝であるとし、『法華玄贊』もこの山は一切の山の中で最勝であり、如来も多くこの山で法を説いたとしているから、これら各師には相通じたものがあるといえるかもしれない。そして如来が成道した場所にたいする報恩のために住したといい、仙人などが住したという時、そこにはただ単にインド実在の山として受けとめようとするのではなくて、この山に理念的な何かを求めようとしたのではないか、と考えることが出来るであろう。

そしてこの理念的な何か、如来寿量品における「靈鷲山」の解釈にさいし、未来益人の処といい、非生現滅・非滅現滅といい、実報土といい、迹身は滅しても法身は常だといい、靈山に処現するのだというような解釈に展開せしめたのではなからうか。このような仮説をたててみると、如来寿量品における「靈鷲山」は、インド実在の山から時間空間をとび越えて、永遠の未来と結びつく、永遠の未来へと展開するための一つのモニユメント的な役割を果たさうとしたのではないか、と思われる。

鳩摩羅什が法華経の訳出にさいして、序品を初めとする各品においては、全て耆闍崛山と音訳したのに、如来寿量

品においては靈鷲山と意訳したのも、理由あつてのことであつたといえるであらう。そして鳩摩羅什の意図は法華經の注釈をした各師によつて、みごと受けとめられたと考えることも出来よう。

[註]

- (1) 布施浩岳「『靈鷲山』の語義」(『大崎学報一〇八号 p 53—54)
- (2) 大正九・一下
- (3) 同・六三上
- (4) Saddhama-Pundarika-Sutra H. kern and Nanjio p. 1
- (5) 大正九・三三中
- (6) 同・一〇三下
- (7) Sadh p. 248
- (8) 大正九・一三四下
- (9) 同・四三中〜下
- (10) 同・一一四下
- (11) Sadh p. 324
- (12) 大正九・四五中
- (13) 同・一一七下
- (14) Sadh p. 337
- (15) 大正九・五四中〜下
- (16) 同・一一七中〜下
- (17) Sadh p. 426・428
- (18) 大正九・六一上
- (19) 同・一三二下

『靈鷲山』考(望月)

「鷺鷥山」考（望月）

- (20) Sada p.472
- (21) 大正三十三・五七七中
- (22) 同 二十五・七六下
- (23) 同 三十三・六七一下～六七三中
- (24) 同 三十四・五中下
- (25) 同 一三五下
- (26) 同 四五六中下
- (27) 同 六〇九中～六一〇上
- (28) 同 六六五上～六六六上
- (29) 同 八三三上